

園部哲史・大塚啓二郎著

『産業発展のルーツと戦略 ——日中台の経験に学ぶ——』

知泉書館 2004年 xvii + 295ページ

はま ぐち のぶ あき
浜 口 伸 明

I 本書の貢献

グローバル化時代には立地問題はもはや無意味だろうか。確かに世界は狭くなった。例えば中国製のコンピュータを使って、インターネットで見つけたロンドンのブティックから服を取り寄せる。その服はパリでデザインされ、中米のエルサルバドルで韓国製の布地を縫製したものかもしれない。アメリカ系のクレジットカード会社との料金請求のトラブルの窓口になってくれるコールセンターの所在地はインドのバンガロールだ。通信・輸送の技術の進歩によって、そんなふうにものや情報がめまぐるしく世界を駆け巡るなかに、私たちの日常は置かれている。

消費者にとって、購入した品物がどういう経路をたどって生産されて手元にたどり着いたのか詮索しようと思っても、それはすでにあまりにも複雑化しているし、品質は見事にコントロールされているのだからその必要もないだろう。それでもなお、経済問題としての立地の重要性が失われているとは言えない。商品を提供する企業にとっては、生産要素価格の違いに従って工程を地球上に最適に配分して効率的に連携させることは価格競争力に決定的に重要な影響を及ぼす。雇用される労働者にとっては、自分の居住している地域がグローバルな生産ネットワークのなかに組み込まれているか否かは、所得機会に大きな影響を与える。例えば、市場開放後の中国が「世界の工場」と呼ばれているとはいえ、中国全土が工業化しているわけではない。発展は沿岸地

域に集中し、北京・華北および環渤海地域、上海を中心とした華東地域、広州・香港を取り巻く華南地域の3つの極が突出する一方で、それ以外の内陸地域との格差は拡大していることは一目瞭然だ。どうやら世界的に断片化されてネットワーク化している経済活動は、特定の場所に集積地を形成する傾向があるようだ。産業が場所を選ぶ以上、発展途上国の工業化や産業発展を考える際に、空間的視点をもつて産業集積が持つ経済的意味を考慮することの重要性は論を待たない。

本書はまさにそのような時代の要請にこたえるものであり、本書が2004年度・第47回日経・経済図書文化賞を受賞したことは、真に時宜を得たものである。また、時代背景もさることながら、本書がすでに社会的に高い評価を受けている理由として、以下の2つの多大な貢献に触れないわけにはいかない。第1に産業集積を扱う空間経済学の理論とシェンペーターの流れを汲む内発的発展論の2つをつなぐ着眼点から、経済発展を動態的に説明する論理を構築し、それを開発政策論に発展させている点である。これは独創的で、今後多くの研究の動機となりうる知的作業であった。第2に、本研究の根幹をなしいる計量分析には既刊のデータを用いず、地方の行政機関に埋もれているデータや、直接地場企業を対象にアンケート調査から得られた一次資料に基づいて、分析枠組みに適したデータベースを著者たち自らが構築した点である。これは分析者の視点からデータの質をそろえることによって、異なる地域間の比較研究を可能とし、本格的実証研究となって結実している。実際に現地を見てデータを吟味した結果、産業を創始し革新を達成した企業家の顔が見えるような血の通った研究となっている点も見逃せない。さらに、構成上の堅実さも魅力のひとつである。論述は、仮説・課題の提起、統計的検証、結論の要約、という科学的スタイルが貫かれており、読者に実にすっきりと整理された読後感を与えていた。その構成は以下のとおりである。

第I部 課題の設定

第1章 はじめに

第2章 日中台の産業発展モデル

第Ⅱ部 産業立地と産業発展

第3章 関東地方の広域集積型発展

第4章 台湾の郊外集積型発展

第5章 揚子江下流域の集積形成型発展

第Ⅲ部 産業集積の比較研究

第6章 織里と備後のアパレル——商人主導の
発展——

第7章 日本と重慶のオートバイ——技術者主
導の発展——

第8章 台中と温州の機械産業——集積地に
おける革新と模倣——

第9章 蘇南と台湾北部のプリント配線板——
集積の形成と模倣的競争——

第Ⅳ部 結論

第10章 内生的産業発展論の構築に向けて

II 産業発展と産業集積

低開発地域が産業を興し発展させるには、乗り越えなければならない大きな障壁がある。規模の経済、情報の非対称性、調整の失敗など様々な理由で市場が完全に働かないのであれば、自由放任のままでは、発展が望めないからである。そこで何らかの形で市場の歪みを矯正する措置が求められるが、著者たちは、政府にも直接にはそのような役割を期待していない。政府ならうまくやってくれるという前提を許す根拠もないからだ。その代わりに、なにも政府に頼らなくとも、経済主体には制度や仕組みを自己組織化して、自らの市場の歪みを補正しながら発展を促進しようとするバイタリティがあることを、本書は示している。これは実にエキサイティングなアイディアだ。それがすなわち「いまなぜ産業集積か」という問い合わせの答えになっている。多数の企業の集まりである産業集積には、企業の模倣と革新を容易にしてさらなる産業発展を促す温床として機能する力があるというのは、注目すべき指摘だ。

アルフレッド・マーシャルは、産業集積には「場の空気」(something in the air) があり、そこで生まれた子供たちは自然に特殊な技能を身につけてしまう、と観察した[Marshall 1920]。いわゆる情報の

スピルオーバーの重要性についての、有名な記述である。本書では、著者たちは集積内に漂う情報を市場情報と技術情報の2種類に分別し、創業者企業の経営者、模倣により参入してくる追随者、新結合を成し遂げる革新者、といった産業集積のプレイヤーたちの前歴が、流通・販売を担っている商人（あるいは企業のセールスマン）であったのか、技術者であったのかによって、産業集積を市場情報が重要な商人主導によるものと、技術情報が重要な技術者主導によるものの2通りに区別している。本書で調査された事例のなかでは、広島県の備後絹産地（現在の福山市新市町付近）と織里（中国浙江省）のアパレル産業、温州（中国浙江省）の弱電機器産業、中国蘇南地方の昆山、蘇州、常州におけるプリント基板産業を商人主導の産業集積、浜松と重慶（中国）のオートバイ産業、および台湾における台中の工作機械産業と桃園県のプリント基板産業を技術者主導と分類している。

本書から、商人と技術者のどちらが主導的立場にあったかは、市場情報と技術情報のどちらが当該産業にとって重要でより高いレン特を発生させるか、に依存すると読みとることができる。オートバイや工作機械のような高度に差別化された財であれば技術情報の重要性が高く、アパレル製品や単純なプリント基板のように、製品が標準化されていて価格の代替弾力性が高い財の場合は、市場に有利なアクセスを持っている情報の有用性が高いであろう。技術者主導の産業集積は熟練労働者を雇用しやすい都市地域に形成されやすいが、商人主導の産業集積は低賃金の農村地域にあって、生産者を市場とつなぐ役割を果たしている商人が、広義の輸送費（あるいは取引費用）を軽減する役割を果たしている。ただし、プリント基板産業の事例が示すように、同じ産業であっても、低品質なものは商人主導で、高品質なものは技術者主導で発展するというように、製品の質的向上が起こる過程で変異が起こることもあるようである。

本書で描寫されている産業集積の成長過程は、模倣による新規参入の増大を伴っている。その際に集積内部では、情報量の増大、学習を通じた労働者・

経営者の技能向上、分業の進展による部品調達の活発化、といったメリットが拡大している。他方、競争相手が増えることによってひとつひとつの企業の利潤率が低下するデメリットも生じている。ここで、従来の産地論や空間経済学にはなかった本書の議論の独創的な視点は、利潤率の低下を克服しようと、産業集積内から「新結合」を達成して新しいレントを生み出す革新的企業が登場すると考えているところにある。すなわち、産業集積は模倣を容易にして産業の量的拡大に貢献すると同時に、革新の温床にもなっていると考えられるのである。

革新の方法においても、主導的立場にあるのが商人である場合と技術者である場合では違いが見られることが指摘されている。商人主導の産業集積では、革新は製品の検査システムの改善による差別化、ブランドネームの確立、遠隔地の消費者への直接販売の実施など、製品そのものよりも流通過程に起るのに対して、技術者主導の産業集積ではオートバイ・エンジンの性能の向上、工作機械から数値制御機への転換など、製品の質的向上を伴う。

例えば、現在日本最大の作業衣の生産地となっている備後のアパレル産業の事例では、もともと伝統的な備後紺で全国的に顧客を持つ問屋商人が工場を操業し、その後多くの商人出身の追従者とこれらの企業の元従業員が独立開業する、いわゆるスピノフが起こっていったことが紹介されている。模倣が多くなったあとは、自社ブランドの確立や大型小売店と直接取引するルートの開拓など、マーケティング面での新戦略が重視されるようになった。

本書が指摘しているところによれば、量的拡大期を通じて製品の技術的進歩は小さい。言い換えれば技術水準が低いまま留まっていたので、模倣が容易だったのである。また、創始者世代から始まった量的拡大期の企業家にとって、教育水準に代表される人的資本の水準はあまり重要ではない一方で、革新を起こして質的向上期に移行してから後は、教育水準や業界における経験年数といった知識(人的資本)の質が企業のパフォーマンスに決定的な影響を与えるようになる。これらは、商人主導・技術者主導のいずれにかかわらず、また日・中・台のいずれにお

いても共通した特徴であったとのことであり、この東アジア的特徴は、量的拡大がすでに製品の技術水準の上昇を伴っていたアメリカのケースとは対照的だという指摘は興味深い。単純化して言えば、いち早く絶対的な技術的優位性を確立して市場を独占することがアメリカ的だとすれば、ある程度模倣者の追従を許容しながら集積の経済を作り出すことで量的拡大を達成していくものの、ある時点で革新的企業が現れて質的競争に移行していくというのが、東アジア的ということになろうか。

ここで、本書が描写する産業集積の動態的変化についていさかあいまいさを感じる点について書き留めておきたい。それは、質的向上期以降の産業集積はどのような姿になるのか、という点である。質の悪い製品しか作れない模倣者は淘汰されてしまい、市場の寡占化が起こっているのだろうか。そうすると、産業発展の温床としての集積の機能は、産業発展初期の一時期にのみ必要な、保育所のようなものということになろう。あるいは、技術革新によって獲得したレントも、結局は再び模倣的競争に晒されて次の革新を喚起することになるのだろうか。この場合、産業集積は存続し続けることになるが、模倣的競争が繰り返されるということは、本書で想定されているようにある局面を境に質的競争に移行するという二元論とは性質が異なってしまう。この点についての十分な考察は行われていないように思われた。

III 開発戦略への政策的含意の検討——空間経済学の視点から——

本書は前節で検討したような産業集積の機能に着目し、これを後進地域に適用する開発戦略に取り込んだ集積支援プログラムを実施すべきだという政策的含意を導いている。それは後進地域に官営ないし外資の創始企業を設立し、ここから次代の経営者と技術者が育っていく過程を積極的に支援するというものだ。具体的には、集積内で原材料の調達や製品の販売を促進する市場(いちば)を設置することや、工業区のような優遇地区を設置すること、技術指導

の国際協力を活用した人材育成のためのトレーニング・プログラムの実施、知的財産権制度・登録商標制度の整備、高等教育・研究機関と企業の地域的連携、などを含む。

個別産業や特定企業を支援するような産業政策ではなく、このように産業を抱える地域ごと支援していくという発想は興味深い。しかし、現実にはどこにでも産業集積を作り出せるわけではないだろう。ひとつひとつの産業集積の内部構造だけを見ていては見落としがちであるが、空間経済学〔Fujita, Krugman, and Venables 1999〕が持つ一般均衡的な視点に立てば、産業集積が経済空間全体の一部として存在する以上、残りの地域には産業が集積していないことになり、そのような場所でいくら良く計画されたプログラムを実行しても産業集積は形成されない。例えば、東南アジアでは、現在バンコク周辺に自動車産業の集積が拡大しつつあるが、東南アジア市場で、これ以外にマレーシア、インドネシア、フィリピン、ミャンマー、カンボジア、ラオスで自動車産業集積を作ろうとする産業政策が適切だろうか。地域市場の統合が進めば、なおのこと1カ所で規模の経済を生かして生産を集中するほうが効率的になろう。もちろん、東南アジア市場がさらに成長すればバンコク一極ではなく、複数の集積地を形成することがより合理的になるだろう。このように、新しい産業集積が形成される可能性は対象とする市場の統合度と規模に依存するという視点は、本書の分析から政策を議論する際に、考慮しなければならない問題であろう。

他方、空間経済学は本書から学ぶべき多くの示唆を得ている。そのもっとも重要なものは、第1章で提示されている地域経済学に対するいくつかの批判のなかで、産業集積の動態的な変容を考慮する視点を欠いている（14～15ページ）という点である。空間経済学はこれまで市場の規模と統合度の相互関係を軸にした数理モデルを道具立てとして進歩してきたが、マーシャルが重視した、産業集積内での個人間のやり取りが生み出す情報や技能のスピルオーバーに基づく学習・模倣・革新といった、本書が主題として扱ったトピックには十分注意を払ってこなかった。これはスピルオーバーを恣意的な前提をおかず解析可能なモデルで表現することが容易でないという技術的問題によるものであるが、本書で示された様々な実証研究結果は、確かにスピルオーバーが産業集積の形成に重要な役割を果たしており、空間経済学が挑むべき課題であることを提示してくれている。

文献リスト

- Fujita, Masahisa, Paul Krugman, and Anthony Venables 1999. *The Spatial Economy: Cities, Regions and International Trade*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Marshall, Alfred 1920. *Principles of Economics*. 8th edition, London: Macmillan (邦訳は馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理』東洋経済新報社 1966年).

(神戸大学経済経営研究所助教授)